

暗夜に光をどう探すか

対談者 経済評論家・高橋 亀吉

この対談は石油ショック、約一年後の時点で行われた。地盤変動を呈しはじめた日本と世界の経済について、市井の碩学・高橋氏との突っこんだ討論。大平が国民の力に、無限の信頼を置いていくことが示されている。高橋氏は昭和五二年死去。

経済の基盤そのものが変わった

高橋 実は、大蔵大臣にご就任になっておめでとうといいたいのですが、たいへんむずかしい時期におやりになることになって逆にご苦労さまといいたいくらいです。というのは、最近、いままでの考え方を再吟味せねばならないような、いろいろな問題がどんどん起こってきている。ことに来年度の予算ということになると、来年の四月の時点においてどうなるかを考えに入れねばならない問題だと思つのです。ところが、いまからまだ六カ月もある。ぼくは、いまは四半期ごとにぐんぐん変わる時期だと思つのです。たとえばいまから暮れまでに相当変わり、一 三月にまた相当変わって、四月ということになる。それを正確にここでどうだということとは非常にむずかしいが、現実にはそういう

事態にぶつかって、いろいろ考えねばならない段階だろうと思つわけです。

そこでまず来年度の予算編成の考え方をお聞きしたいのですが、これはさうとう問題があると思いませんね。たとえば、財政を考えるにしても、原材料としてのセメントが幾らあるか、その他のものなどのくらいあるか、そこまで調べて予算を立てるといふ方針でいかれるということが新聞に出ていましたが、それは従来の方とかなり違つた点だと思つのです。さういふ、かなり違つたという感覚でものを考えるのかどうか、その辺はどうでしょうか。

大平 おつしやるように、経済の環境というか、条件というのは、非常に急激にかつドラマティック（劇的）に変わりましたね。資源の制約とか労働力の不足とか、高賃金とか環境の制約とか、いろいろな要因がありますけれども、根本的には条件というよりも基盤そのものが変わったとぼくは思つのです。

高橋 私もさうだと思ひます。世界的に基盤が変わつてゐるということですね。

どろんこの道をどう走るか

大平 世界のドルに対する信任がゆるぎない状況にあつて、二三年間ですが、その間「ドル」三六〇円というところで、一応の経済の安定した目安が立つておつた。ですから、財政を運営するにしても、企業の経営をする上においても、また個人の家計はもろろん、大体においてさういうゆるぎない一種のハイウエー、ちゃんとベープ（舗装）された道があつた。ですから、あまり腕のしつかりしていない運転手でもどうにか安全運転ができるという状況でした。それが数年前からドルにかげりがさ

してきて、三年前に完全にホールドアップしたという状態から、世界の秩序の柱がくずれ、経済の展望は立たなくなつた。私は、いま資源の危機とか食糧の危機というけれども、もし基盤がしっかりしておればそういうこともあるいは起こらなかつたかもしれない、起こつても程度はごくマイナー（微小）な変化に終わつたと思います。

けれども、いまはハイウエーから泥濘でいないの道にのめり込んでしまつたような感じですね。そこでハンドルのとり方をちよつと間違つたと転覆しかねない、大げがしかねないという状況です。だから、遠くを見るといふよりも、目の前にあるぬかるみをどうハンドル切つて回避するかという感じがするんです。そこにいま全神経を傾注しなければならぬ。だから、長期展望はおるか、中期の展望もなかなか立ちにくいという状況にあるので、気のきいた展望を国民に示すなどという自信は持てない。しかしこれはおそらく日本ばかりではなく、どの国も私はそつてはないかと思つたのです。

ところが、ちゃんと舗装されていて安全運転ができる道が、世界のあたりまえの状態なのか、それともはじめからどろんこの道で、展望がはつきりしないようなというのがあたりまえなのか、私はどつちともいえぬと思つたのです。いままでは正常であつたけれども、いまは異常になつたという見方もありましようし、いままでが、ある意味で非常に安定しておつたというだけの話であつて、現在直面している困難こそ、本来の世界の姿なのかもしれない。そこで一つの心がまえとしては、こういう時代にまずめげないことが第一に必要なのじゃないだろうか。グチつてみても始まらないから、こういう状態はこういう状態として、神さまが与えてくれたものだ、その中でみんなが苦勞するということも、ある意味において、人類に与えられた一つのむちというふうに受けとめたい。

高橋　それが第一の心がまえだと思いますが、同時に、いままでの路線がきまつたものだと考える

ことも間違いないかと思うのです。かなりわからないから、いつでも臨機応変にできる心がまえ、それがいまの場合、一番必要なのではないか。何かここで一つの方針を決めてやれるというふうに見える時期じゃないのではないか。いつでも臨機応変に、時代の変化に応じて対応できるという姿勢、政策においても心がまえにおいても、これからは固定した考え方を持たないということが、この際は大事なのではないだろうか。

大平 そのとおりですね。だからいまは暗夜行路だ。提灯を持たずに暗い道に行くようなものだ。何もかもわからぬのだ。といって、あすは知れたもんじゃない、それでしかたがないんだといっては敗北主義になってしまう。それはいけないことです。いまがたいへんな時代なんです。当面、われわれは日本の財政も経済も、ともかく転覆しないように運転していかねばならないとすれば、運転手としては何を手がかりに運転をしていくかを考えなければ相すまないのではないか。

そこで私が考えていることは、いま日本だけがそういう困難な事態にあるわけではなくて、世界全体がみんな苦悶をしているということですね。その苦悶の中から世界全体のどこかから脱出をはかれないかとみんな思っているわけですね。それにはどうすればいいか。たよりになるモノサシは一体何かということ、みんなどの国も模索していると思うのです。

一ドル三〇〇円前後におさえたい

大平 その場合、日本のことを考えたとき、やはりドルとの関係を重視していききたい。ドルというのはたしかに信任を問われている。それから相当インフレーションもしているし、アメリカも内政、外交

とも、非常に困難な局面に立っているけれども、日本の経済というのがだいたいドルの衛星圏にはいつているですよ。よかれあしかれ、過去も現在もそうだし、将来もそういうところからフリーになるうとしたってなれるものじゃない。

だとすると、何を目安に日本の身がまえをするかという場合に、私はドルと円との取組み方というところに一つの目安を置かないといかぬのじゃないかと思えます。その場合の目安の置き方が問題です。一ドルはスミソニアン体制の三〇八円から二六〇円前後まで円高になったが、その後ジリジリ円安傾向をたどってきて、それで三〇四円まで行ったわけだ。これはみんなもう少し真剣に考えなければいかぬ問題じゃないかとぼくは考えるのです。

そこで日本経済が対ドルどのくらいのところが目安になるか、これは見解がいろいろ違うし、産業界、金融界、それぞれ私は思惑は違うと思う。けれどもわれわれどこにも片寄らない立場で日本経済全体から考えてみると、少なくともあるところでは対ドルの円相場というのが高い安定度を持たねばいかぬのじゃないか。そしてそれはどのくらいの目安かというところになると、いろいろ理屈もあるしとらえ方もある。しかし私は三〇〇円内外というところが一応の目安で、それから大きく円が下がるということは避けねばいかぬのじゃないかと思う。そうしないと、そこで大きな風穴があいてしまつ。いま物価だ賃金だといっている議論をするけれども、ベースそのものがくずれてしまつのだ。私はそこをなんとしても三〇〇円内外のところにきちん安定させなければいけないと思う。

いまドル自身が信任を問われているときだから、お前がたよりにしてあるドルというのはあてにならないといわれたらそれまでですけれども、しかし、いま神さまはそんなにりっぱなクライテリア(基準)をわれわれに与えているわけではない。だから、これを一つの目安にしていかないといかぬの

じゃないか。貿易収支は若干の黒字で、貿易外収支は恒常的な赤字ですから、經常収支はともかくバランスするところは、一応国民も政府も決心して当たらなければならぬ道標じゃないか。そうすると、あと資本収支の問題は、われわれ政府が中心になって喚起しなければならぬ問題です。われわれが懸命にこれに対応策を講じていけば、私はできない相談じゃないというのが、財政經濟運営にあたってのまず第一の考え方ですよ。

高橋 その点は大臣、一つの新しい着眼点をお出しになったと思う。というのは、いままでの日本のやり方は、物価優先といって、物価だけをモノサシにしている。それでいいのかということを実はぼくは提起したいと思つていたんです。それよりは、大体おっしゃるような線で為替の安定をはかるにはどうすればいいか、それを中心に政策を考える、そういう問題にも関連してくることですね。

そこで実は、現状をどう見るか、という問題ですけれども、私は、こういうふうに見るべきではないかと思うのです。つまり、一九三〇年代と比較してのことです。一九三〇年代はいまとは逆で、農産品その他が非常な生産過剰になり、物価が二分の一、三分の一に暴落した。そのためにいろいろな混乱が起こつたわけです。こんどは逆に農産品、石油その他の物価水準が革命的に上がつてきて、そのために世界の經濟に大きな混乱が起きている。

一九三〇年代には、物価が低落したので、これをできるだけ下げないようにしようという政策をいろいろとつたけれども、結局は下がつたものを上げるといふ政策は失敗して、新たな水準に順応するという政策にかつたわけです。しかし、あの段階において非常な混乱を起こしたのは、各国が輸入制限をし始めたからです。つまり、農産品が暴落して農産国は金が払えなくなつた。農民層の購買力もガタ落ちになつて、國際収支が農産国を中心にして非常な赤字になつた。たとえばイギリスも農業

が多いから、輸入制限をし始めた。それで世界経済に混乱を来たしたわけですね。

こんどの危険はどこにあるかという点、農産品や石油その他が不足しているから暴騰したのですが、これができるだけ上げないようにしようという政策を各国がとろうとすると、アメリカのような国が輸出制限をするということです。アメリカが輸出制限をすれば農産品を抑えられる。自分たちだけの物価水準をきめることができる。みんながそれを始めたら、ものが足りなくて国際経済はつぶれてしまふ。そこでそういう形で国内の物価を極力安定するというをやったらいへんだということになると、国際経済もこの問題をどう解決するかという問題にぶつかっているのではないか。それがまた日本にも影響しているんだと思つたのです。

根本の考え方は、世界的に消費を二割なら二割減らさなければいけない。それをどうして減らすかということが問題だと思つたのです。イタリアのように、一つは輸入制限をしてそれを使わないという形も考えられるでしょう。あるいは統制で消費を抑えることもできるでしょうが、結局世界的にいえばブライスマカニズムによるほかはないんじゃないか。それだけ物価が上がってくる、上がってきたら購買力が不変だとすれば、それだけ消費を減らすほかはない、そういう問題にぶつかってきます。一九三〇年のときは、あまつたのだから使うほかはない。そこでケインズなどのようにいままで節約を美德としていたものを、節約は罪悪だ、消費は美德だ、うんと使えという理論が生まれてきたわけです。

こんどは足りなくなったのだから、各国が世界的に消費を抑えるほかはない。それに応ずるやり方いかんですが、世界的にいうとブライスマカニズムによるほかはない。そういう形で順応するほかはない。ただ、これは政治家としては一番やつかないことで、物価は上がって困る人がうんと出てくる

のだから、それに対してどういつ対策をとるかといつこと、各国とも悩んでいるんだと思うのです。そこで、国際的にどういつ調和ができてくるか、国内はどういつ調和を保っていくか、日本としても国内的な問題として結局そこにくるのじゃないかと思うのです。その立場で物価ということを世界的に考えねばならない。

極力抑えればいいという段階から、消費を必要な部分だけ減らすにはどのくらいの物価水準でいくのがいいのか、それにはどういつ形で減らしたらいいか、国民のコンセンサスを得なくてはいけない。そつう問題にぶつかつてゐるんじゃないでしょうか。

新しい価値水準を受け入れる

大平 そのとおりですね。一九三〇年のときの状態は私もよく存じませんが、あのときの状態と今日直面している状態については、おっしゃるとおりだと思います。ただそのときと違つてゐる点は、国際的にみんな力をあわせていかなければ対処できないんじゃないかといつ一種の国際的協調に ついての人間の英知が当時よりはだいぶ発達してきてゐると思つたのです。その点は一つの救いです。第二に、国際的な経済といつのは、プライスメカニズムといつるか市場の機能といつものをできるだけそこなわないでいくといつこと、いろいろな国内外の規制が事実上あるけれども、それは規制を強化するといつよりも、むしろより自由なものにしていかないと、世界経済全体が先細りになつてしまつてやれないんじゃないかといつこと、昨年一〇月に東京でガット総会が開かれて、あれだけの国が集まつてゐるいろいろな議論はしたけれども、結局「東京宣言」といつものはそつういふフィロ

ソフィ（考え方）ででき上がったわけですから、それも私は第二の救いだと思つたのです。

そこで日本としては、どの国よりも多く、高く、強く、そういう意識を持たないとやっていけない国ですから、そういう状況をつくり上げる意味で、非常に主導的な役割を果たさなければならぬ。これは世界のためでもあるし、日本人自身のためということですから、日本が国内的に勝手な規制をやつて、資源が高くなつたからそいつは輸入規制していくんだとかいうようなことをやつたらたいへんだと思う。食糧にしても、石油にしても、その他の原材料にしても、国際的なルールにしたがつて、市場の機能を生かしながら、そこで形成された価格を謙虚に受け入れていくことです。それに対してあまり細工はしないということを前提にして、そういう原材料や燃料や食料の供給を受けた加工国家として、日本はどれだけの付加価値を加えてまた世界に還元できるかということ、すなおに考えていくべきではないだろうか。そのリサイクリングがうまくいかないと日本はやっていけないんじゃないか。それだからこそわれわれは、あらゆる政策の基本に、やはり日本経済と国際経済との接点面についてきちんとした姿勢をとっておかなければいけないぞ、ということを感じるんです。

高橋 そうなんです。つまり、いまおっしゃつたような点で、新しい世界の情勢のもとで日本が率先して、対応できるような政策をとる、その点、まったく同感ですが、実は農産品やエネルギーまで入れている不足ということを一番すなおに考えるのは日本じゃないかと思つたのです。というのは、アメリカではこんなに原産品が上がつてしまうと、農民は不作のところは、ダメだけれども、豊作のところは、うんと儲かっている。石油一つとつてみても、大部分は石油から石炭エネルギーを国内で出しているでしょう。これだけ上がると、生産者は、うんと儲かるわけです。しかし他方において、国民の多くは、とくに低所得者は、物価が上がつて生活に困っている。そういうふうなアメリカでは、一

方にうんと儲けた者があり、一方で生活が困っている者がある。これをどう調整するか、そういう問題を考えなければいけない。

しかし世界的に、ものが不足してきた、全体として消費を抑えるほかはない、そういう形でものを考える場合に、日本ではこれだけ上がっても、儲けた人はいないんですよ。一時、儲かっていた人がいるけれども、それは仕入れがたまたま安かったたので儲かったという一時的なものであって、日本全体として、儲かっている人はほとんどいない。みんな犠牲にあうわけです。ですから、消費を減らすほかはないんだといっても、分配の問題は国内的には起こらない。みんながそれをよく理解すればいい。しかしいまの段階ではかならずしもみんながそう考えていないから、分配問題としてとらえられている。そういうことからいうと、日本が一番すなおに国際的に協調するほかはないんじゃないか、ということを考えられるようになるのではないか。

大平 そのとおりですね。

グチってもはじまらない

高橋 そうすると、ある点までものが上がったということは、各国物価が上がっただけプライスメカニズムで消費を減らすということなのです。それに対応して、ムダな使い方をやめて、世界的な供給不足に対応していく、そういう問題をおりこんでいくと、もう少し国際的な対策ができるんじゃないか。

大平 それは、こう考えるのです。私、たまたまことしの二月一日に、国際エネルギー会議で、

外務大臣としてワシントンに行きました。そのとき日本はこんな資源的に足腰の弱い国で、ものの値段が目の玉が飛び出るように高くなって、いままでもっとも有利だった条件が、いまもっとも不利な条件に転化したのですから、いったい日本はやっていけるのかどうか、私としては非常に打ちひしがれた傷心の身をワシントンに運んだという感じだったんです。

ところが、キッシンジャーに会って話をしていると、彼は、日本はそんなに困るということをおまじ感じていないんだ。アメリカの新聞、雑誌の論調を見ても、こんどの会議が一三方国という高度の工業国ばかり集めて、とりわけドイツや日本のように危機を十分に乗り切るだけの力があるものばかり集めて何になるんだ。ほんとうは対応力を持たない、資源を持たない開発途上国を集めて、この危機をどう乗り切るかということを相談してはじめて意味があるのだというふうな論調なんです。

そこで私がぱつと感じたのは、日本とかドイツとかは目に見えぬ資源を、つまり非常にすぐれた頭脳、技術を持つてるじゃないかということ。資源が高くなるということは、日本だけをヒットしたわけじゃない、世界全体について資源が値上がりしたわけだから、それを次の新しい価格水準で、一つの障害物競走をやっていることとする場合に、日本としてはその障害物競走で競争できるだけのちやんとした足腰を持つてるじゃないか、組織力、技術力、労働力を持つてるじゃないかということ。彼らは知っているんですね。だからめいってしまっているのはオレだけで、ほかの連中は、日本はそれほどミゼラブル（悲惨）な状態と見てないばかりか、日本に対するある種の評価、ある種の尊敬、場合によってはある種の脅威さえ感じておるといふ感じがしたのである。

そうすると、これは結局、われわれは国際経済の自由な法則を甘受するばかりでなく、むしろそれをおしすすめる指導的な役割を果たしていきながら、その中で名譽ある生存をやれないはずはない。

世界はそう評価しているじゃないか。だから資源の供給が不安定になったからといってグチってたってしかたがないし、高くなつたといつてグチってたってしかたがない。そういうことが一つの与件として与えられた以上、グチる前にそれを受けて、われわれがこういう工夫をしていくということの世界は期待している。

一月の初めに、中国に行つて周恩来氏に会つたときに、「大平さん、石油ですいぶんあなたのほうは騒いでおるようですけれども、どうですか」というから「もう青菜に塩ですよ、成長の時代は終わりました、耐乏の時代が来ましたよ」といつたら、彼は笑いながら「いや、あなたの国はこの危機は必ず克服しますよ。私はあなたのいうように悲観的にも物を見てません。国はどうですかね」という第三国の話に移しましたけれども、周恩来氏もやはり日本人というのはこういう危機を乗切つていくだろうと見ているんですね。日本人だけが、困つた困つたといつて悲鳴をあげているというのは、けつして名譽にならない点じゃないかなと思つたのです。

新しい感覚での発想を

高橋 いまあなたのおっしゃつた点の一つのポイントじゃないか。いままで日本人がいつている政策や考え方は、みんなうしろ向きなんです。与えられた与件にどう対処していくかを考え、対処していくこととする意志があれば、大臣がおっしゃるのように、日本人は十分力がある。ほくは大臣がいまおっしゃつた点が一番重要なポイントだと思つ。そのポイントからどういう政策がいま要るかといううしろ向きの防衛じゃなしに、この与件をどう克服して、今後、日本はどうして発展していくか、こ

れをどう棄切るのかという状況を中心にした政策をうち出して、国民を引っばっていかれることが大事じゃないかと思うのです。

いままでは、物価を上げるのを極力抑えるところが、これはたいへんだといつてろうばいした、うしろ向きの対策ばかりやっているんじゃないか。そうじゃないんだ、これでいくんだということで、財政も予算も金融政策もその立場で考えることが大事なんじゃないか。それではどうするかということになると、いろいろな発想が出てくる。それで研究する。

大平 通ずるも楽しいが、窮するもまた楽し、でいかぬとね。

高橋 その意味で、日本が一番窮するから、これを与件として克服するには、国民のコンセンサスを得て努力してやろうというのに一番適しているということですね。それをひとつ大いに中心にしてやっていたらいいと思うのです。

大平 だんだん日本人はそういうふうになってきますよ。日本人は危機を克服する力を案外持っているんですよ。過去の歴史がそうじゃないですか。けれどもいまおっしゃるように、前向きに回れ右の転換をして蛮勇をふるってやるというところは、まだまだなかなかできていない。私も役所に来て毎日勉強しているんだけど、「ともかくこうやればこういうメリットは確かにありますよ。それは同時に、こういうデメリットがあります」とデメリットばかり勘定して、そればかりに非常に神経質なんですよ。「そんなことをいよいよたら、お前ら何にもできないじゃないか。こういう新しいデメリットが出てくるが、そのデメリットは次の政策でこう消していくという、その次の手を出せ、お前らそんなことで一々、いや困りましたなんていうな」といっとる。何かいうとそれはこういうデメリットがあるからいけませんなんて、頭のいいやつはすぐ考えるから困るんですよ。(笑)

高橋 あらゆる政策にはデメリットがつきものです。しかし問題は、メリットが六、七割以上あり、デメリットが三、四割といったら、メリットのほうをやるほかはない。しかし、政策というものはある段階においてはメリットのほうが多くデメリットを少なくやっても、次の段階になると逆になる。またある段階においてはデメリットが非常に多いけれども、ある段階においてはメリットが多くなる場合もある。ところがみんなまおっしやるように、デメリットが少しでもあればいけないと考えているのがおかしいんですよ。そんな満点だけの政策というものはありっこないんですね。

大平 その点については、サビついたのでだんだん洗い落としていかなければならぬ。

高橋 ぜひやってもらいたい。

大平 たいへんですよ、これは。(笑)

高橋 たいへんだけれども、実は大臣がもう少しそういうものを払い落として、いろいろな発想ができたところに私は対談したかったわけですよ。

大平 しかし、きょうはまあフィロソフィにとどめておいて、今度はもう少し具体的な政策についてご意見をお伺いしましょう。

高橋 いや、それでやれば、ぼくがいろいろいおうとしていることも何も、今度は大臣の発想で出るわけだ。ひとつ大臣の発想で大いにやっていたきたいものです。